



いろいろな人が集まることが出来る居心地の良い場所と支えに。それが「こころん」で目指すもの。町内の専門学校では次代を担うソーシャルワーカーの育成に努め、全国を回って各地でも人材養成に積極的に係わってききました。自閉症の子供たちと家族のためのサポート活動を中心に続けてきた経験が、新たなソーシャルワークサービスの拠点で新たな展開を見せ始めています。

昨年10月、「こころんく東川」が発足して副理事長に。理事長の片山寛美さんとは、14年間運営してきた「びつころ」が知り合うきっかけ。

当時10歳だった自閉症の息子さんを連れて「びつころ」を利用するようになり、今のNPO発足につながったのです。(1月号「子育てチャンネル」参照)

「就職した施設は、自閉症の人たちの利用が多い施設。親切にしたつもりなのに、利用者の方の中には、暴力的に拒否行動を取る人もいる。『何でこんなことされなければならぬんだらう?』と考え始めたんです。」

そして分かったのは「理解できないので、蹴飛ばしたり、叩いてきたりする。理解できないことが過剰に働いて、必死で自分を防御する行動になる。だから乱暴者と思われたり、『危険だから施設に入れなければ』と思われてしまう」ということ。

「でも小さいころから理解される環境で育った子は、まったくそんなことなく大人になります。その時気づいたんです。きちんと育つ環境があれば」と。

障がい者福祉に大きな興味を抱くようになったきっかけは、同居していたおばあちゃんの存在だったそうです。

「30歳くらいまでは見えていたそうだけれど、白内障で全盲になってしまった。『見えない世界、人と違う世界ってどんなものかな』って興味を湧いて、『もつと勉強したいな』と進学したんです。」

大学で障がい者福祉、ソーシャルワーク(社会福祉援助技術・活動)を研究していた立場から、障害者福祉施設の職員に。その後「現場にいたい」と自ら民間の「サポートセンターびつころ」を立ち上げて運営し、東川での活動にも係わることに。

ハンディを持つ人と家族をサポートする支援を研究し、人材を育成する国内プロジェクトチームの一員でもあります。

障がい者の方と家族のための施設は、今まで地域活動支援センター「かたくり」しかありませんでした。活動には自閉症の人たちばかりでなく、障がい者、高齢者、子供たちのための多くの役割が期待されています。

こころんく事務所



共生サロン「こころん」(社会福祉協議会事務所)旧町立病院並



道内各地の障害者支援施設関係者も施設の視察に來ています



「障がいのことをもっと知ろう」研修会(こころんく東川)

大友さんが講師となって開かれた尼崎市の「行動援護従業者養成中央研修会」(今年1月)

おとも よしみ  
大友 愛美さん/NPO(特定非営利活動)法人ノーマライゼーションサポートセンターこころんく東川副理事長/東町1「共生サロンこころん」(事務所) / ☎82-2666  
根室市出身、46歳。北星学園大学(札幌)卒。ソーシャルワーカー。卒業後、社会福祉実習助手として母校で3年間勤務。その後釧路町の(社)釧路北斗会の知的障害者更生施設、釧路西原学園でソーシャルワーカー。7年間勤務後、東川養護学校卒業後の生徒らを支援する目的で自閉症児(者)のための民間施設「サポートセンターびつころ」(旭川市東旭川)を開設。同センター代表。(社)ゴーシュの魯(美瑛)理事、NPO法人自閉症サポートハウスオーティー旭川(旭川)理事。(独)国立重度知的障害者総合施設のみどの園(高崎市)の行動援護従業者養成研修全国普及推進プロジェクトチーム委員(全国18人)。名古屋立大学短大部児童学科非常勤講師、旭川福祉専門学校介護福祉科非常勤講師。日本福祉学会、北海道福祉学会、北海道地域福祉学会の各学会に所属。近著・論文に「行動援護ガイドブック 知的障害児・者ホームヘルプの新たな形」(05年、加瀬進編・共著、(財)日本知的障害者福祉協会刊)、「『情緒障害教育研究紀要』自閉症者の『傷つく心』の理解に関する試論」(03年)など。